

「本当のやさしさ」

ノンちゃんは、保育園の年長さんです。いつも元気に遊び回る活発な女の子です。ノンちゃんは、5歳上のお兄ちゃんのトモ君と二人兄弟です。トモ君には、生まれつき自閉症という障がいがあり、話すことができません。

「ノンちゃん。お兄ちゃんのお茶持ってって。」

「はい。」

お手伝いが大好きなノンちゃんは、お兄ちゃんができないことを進んでやってくれます。とても世話好きで、それが自分の役割のようにいろいろな面倒をみてくれています。まるで、おねえちゃんのようなのです。

ある日、友だちと家で遊んでいるときのことです。

「ノンちゃんのお兄ちゃん、何で『あ〜。』しか言わないの。」

「お兄ちゃんは、病気だから話せないの。」

「ふーん。かわいそうだね。」

「……………」

ノンちゃんは、小さいときからお母さんにそう教えてもらっていました。だから「かわいそうだね。」と友だちから言われても、返す言葉が思い浮かびませんでした。ノンちゃんにとってトモ君は、話せないことが当たり前だったからです。

その1ヶ月後のことです。ノンちゃんは、お母さんに聞きました。

「ねーねー。お母さん。ノンちゃんは、お兄ちゃんの面倒を見なくちゃいけないの。」お母さんは、これまで予想もしていなかった言葉に心の中が大きく揺れました。

「どうして、そんなこと聞くの。」

「だって、この前の法事の時、親戚のおばさんたちが『ノンちゃんはお利口さんだから、お兄ちゃんの面倒見てやってね。』って言ったもん。」

「そんなこと気にしなくてもいいの。お兄ちゃんは、お父さんとお母さんがちゃんと面倒見るから大丈夫だから。」

4年が経ちました。ノンちゃんのお兄ちゃんに対する気持ちが大きく変わった時期となりました。

ノンちゃんが小学4年生の運動会の時です。午前中のプログラムが終わり、お弁当の時間となりました。9月残暑が厳しく気温も高いので体育館が昼食会場として開放されました。どの家族も楽しそうにお弁当を食べています。

ノンちゃんの家族も、体育館にシートを敷きお母さんが作ったお弁当を食べていました。

「卵焼きおいしいね。」

「朝から、がんばったからね。」

そんな和やかな雰囲気が一瞬で変わりました。

「アッ。」トモ君が急に怒り始めたのです。その声はとても大きく、体育館中に響き渡りました。周りにいた子どもたちや親の視線が一気に集まりました。お父さんとお母さんは、トモ君が落ち着くよ



うに必死で体を押さえました。

ノンちゃんは、恥ずかしくなり下を向いてしまいました。その後、ノンちゃんは何も話さず、何も食べませんでした。

同じ頃のことです。外食に出かけた時のことです。初めて行くお寿司屋さんでした。座敷に座り、注文をしてお寿司が出てくるのを待っていました。この日は、トモ君の機嫌がはじめからよくありませんでした。

運動会の時と同じでした。「ア - 。ア - 。」お父さんに掴みかかり、腕を引っ掻いています。周りのお客さん、従業員の人たちも何が起こったかという表情で見つめます。

客席の奥の方から「あんな子連れてきていかんわな。」

従業員の人からも「すみません。お静かにお願いします。」

この日は、お父さんがトモ君を店から連れ出し、食事が終わるまで車の中で待ちました。ノンちゃんは心の中で思いました。「お兄ちゃんと一緒に、もういや。」

この日以来、家族4人で出かけることはなくなりました。

さらに3年が経ちました。

ノンちゃんは、中学生になりました。思春期真っ只中です。頭の中では、障がいのある兄のことはわかっているものの、心の中で受け止めることができません。

試験週間ともなるとそのイライラは最高潮です。トモ君のいつもの「アー。」という声が気になって仕方ありません。「うっせー。黙れ。」「ウツゼーんだわ。」

2階の自分の部屋から、食事とお風呂以外は降りてこなくなってしまうようになりました。お父さんとお母さんは、ノンちゃんにどう接したらよいのかわからなくなってしまいました。

ノンちゃんは、中学3年生になりました。楽しみしていた修学旅行に出かけました。修学旅行の3日間で一番悩んだのがお土産です。帰宅したノンちゃんは、お土産を一つずつカバンから出しました。

名古屋のおじいちゃん、おばあちゃんには、お箸を

お母さんには、アイスコーヒーを飲むコップを

お父さんには、ミッキーマウスの刺繍の入ったハンカチを

そして、トモ君にはディズニーのキャラクター魔法使いジーニーのクッションを

修学旅行から帰ったノンちゃんの一言は、

「お兄ちゃんのお土産が一番高かったんだから。」

